

幕末明治の写真師列伝 第三十三回 鈴木真一 その四

ほどなく岡本圭三の評判は宮中にも達し、鈴木写真館は宮内省御用掛となる。そして明治22年(1889)7月16日(火)付『東京日日新聞』では以下のように報じられた。

○御寫眞撮影 此程 皇后宮陛下には尊影御寫眞の御思召にて殊に其術に長じたる譽ある九段の鈴木真一氏を宮内省より御召有り同氏の計畫に依り宮中に寫眞場を建築せしめ同場出来後第一日に 陛下の尊影を寫さしめられたり同氏は其術を磨きて御眞影百四十餘枚を製して奉りたるに殊の外御意に協ひ御慰勞として金五十圓を賜はりたりと云ふ或る高貴の方が右の御寫眞を押し奉りたるは御服は洋装にて實冠を召させ給ひたる御像にして實に鮮明美麗光彩を放ちて拝まれたりと傳聞せり又た其次日には寫眞師丸木某氏にも撮影の御用を仰せ附けられは亦思召を以て慰勞金五十圓を賜はりしよし両氏共其の道の榮譽と云ふべし

鈴木真一と岡本圭三は、英照皇太后、皇后の専属の写真撮影を命じられたのである。鈴木真一はこのことを非常に光榮なことに感じ、これを機会に岡本圭三に二代目鈴木真一の襲名を勧めた。そのため鈴木真一の方はこれより鈴木真(初代鈴木真一)と名乗ることになる。(このため、後世の参考資料によっては、初代鈴木真一と二代目鈴木真一(岡本圭三)の逸話が混在して非常にややこしいことになるので要注意)

また、この時に異例のことながら、鈴木真一の子息、四十と岡本圭三の子息、保羅の二人は学習院への転入学の誘いを受けて、真一はこれを受けることにして、早速、四十を岡本圭三の家に預け、保羅と共に濃紺の学生服を着て、馬車で学習院へ通わせることにした。学習院では二人の名前が奇抜であったことと、平民出身の子供であったことから、「ヨソ(四十)ものとボロ(保羅)乞食は出て行くが良い」などと虐められることもあったが、二人とも持ち前の明るさと聡明さでそれを撥ね退けて意にもとめなかった。また、二人は学習院から帰宅するとすぐに制服を脱いで、横浜の洋服屋で誂えてもらった半ズボン姿になって、近所の子供たちと野球のボールでキャッチボールをするといった、当時としてはハイカラな遊びをしていたが、近所の子供たちもそんな二人に好奇心を持って近づき、仲よく遊んでいるようであった。

これより前、明治14年(1881)夏、内務省御用掛であった月形潔が北海道樺戸集治監の典獄として赴任することになって、妻と共に鈴木写真館を訪れた。月形潔は樺戸集治監典獄のほか、北海道の樺戸郡、雨竜郡、上川郡の郡長も兼務して、空知、上川地区の行政官としても活躍した。

明治16年(1883)4月9日、真一の甥、依田勉三が総勢27名の開拓団「晩成社」を率いて北海道に移住するため、横浜からの出航ということもあって、真砂町の真一の写真館で記念写真を撮りに来た。依田勉三の、ムシロの上でまるで乞食のような扮装の有名な写真はこの時に撮られたも

のである。

明治17年(1884)に、鈴木真一は横浜真砂町一丁目に関口十間余りの白い洋風二階建ての写真館を建築、移転した。この写真館の入口中央には右から左に「写真」という文字の看板があり、二階の瓦屋根には左から右へ「PHOTOGRAPHER」の看板があった。また一階のテラスの柵には、開店を祝う赤いゴム風船が等間隔に飾りたてた。また、建物の正面左右の地面には屋根より高いポールを立ち上げて、その左右のポールの先からそれぞれ紐を地面に垂らして、ここにも10個もの赤い風船が飾られていた。招待客たちはこの建物を背景に記念写真を撮る。真一は長男の金次郎に命じて通りの向こうにカメラを構えさせて、招待客たちを次々に撮影させた。

この頃の真一は、長男の金次郎の語学力をもっとも頼りとしていた。横浜の外国人たちを相手に日本の名勝旧跡、風俗などを紹介する写真を販売するのに、この金次郎の語学力があれば英文の簡単な説明文を付けて紹介することもできたので、大変助かったのである。また、この頃から真一は自分の写真や子供たちの写真を使って、皿や陶板などのその写真を焼き付ける実験を行って、試行錯誤の後、陶磁器に写真を焼き付ける技術を開発した。真一はこの技術を応用して風景、風俗写真を陶磁器に焼き付けて、それを外国人向けの商品として販売、大成功を収めたのであった。

もう一つ、真一が開発した写真技術に「合成写真」がある。これは風景写真を背景に人物を合成したり、一人の人物写真2点を1枚の写真に収めたりといったものであったが、「ハテナ写真」と名付けられて評判となり、鈴木写真館は門前に列をなすほどの繁盛ぶりとなった。この頃の横浜真砂町の鈴木真(初代鈴木真一)と東京九段下の二代目鈴木真一(岡本圭三)はまさに絶頂期であった。

明治22年(1889)2月、写真師小川一真は、写真材料商浅沼藤吉の苦境を救うため、北庭筑波、石川巖らと協議して『写真新報』を発刊した。この『写真新報』は、浅沼商會が明治7年(1874)に出版発行した日本最古の写真雑誌『脱影夜話』の後継となった機関紙である。発行所は博文館書店、編集発行人は小川一真、印刷人安野政幸で、毎月発行、定価十五銭であった。(終刊は第84号9月号)鈴木真(初代鈴木真一)は写真師仲間の勉強会にも率先して活動し、この『写真新報』も支援した。

しかし、順風満帆であった鈴木一族に難事が降りかかる。それは鈴木真(初代鈴木真一)が真砂町の写真館で、自分の片腕、助手、後継者として期待していた金次郎が結核となって、そのうえ慢性的な胃病にも苦しんでいたのである。そしてついに明治25年(1892)4月3日、金次郎は吐血すると、そのまま静かに亡くなってしまった。享年34歳という若さであった。鈴木真(初代鈴木真一)は自分の妻を亡くした経験は二度もしていたが、我が子を先に亡くすとは思ってもみなかった。

(森重和雄)